





源氏物語乃おまを八村上乃は娘おほおゆ院選子  
母親王上東川院よは流しきあちて春乃日れはきく  
可侍らふはくま物流行らんとすもせ行てふ所女院乃  
女房哉後守鳥時娘武部乃房は百といふる物  
流しとらふもつらふしおちせあるもさく小式部すく  
おちしおいとをるといあつしけねくやゆらんあさ  
まく化すおくは流しせを孫いたんきすもせ行し  
たふひしはるんとすりさうて思ひを成りてんや  
さか月せらとれは心とふりや石山おまふててけ  
まはいのちすおねさ八月十五夜れ月水海ふうひ  
てこころあさうかるもとつてまをらふ心乃すみあ  
ゆまに六十帖の内才三乃本を流したたふひな  
他よりさくふらさく業式おといちれちり是は他と  
心すし彼業平の中將の向保親王乃は子作妻

天曜の庫

女房

内親王を家小と云ふそのまふたなくいぬ一又う  
うより小やうと云ふり多えなかりとゆな  
いて光原氏乃君と名付いせり其さゆひか  
二條又條乃好しち乃后小はしりし小あそく  
雲女院二条の侍者小かよる也ふ条乃御  
娘乃好まふ小と云ひしり孫ひしり孫と  
このまふも松くまきけと云ふ條といふ  
さのくまも有るなり有説め西また大臣  
高明のおく醜醜の事れゆ子中一卷乃源氏  
まてこめかちるせ小もれ行りしと又光原氏小  
たえ我心小志ちゆ小よりて紫式部乃る小  
てしうきあゆと云ふりしを宰相師小うりし  
いしと須磨乃浦小之川に孫小創せ小るそんた  
ははした思ふしりあていしけり小ちせ心た

あはれ又らちけあておほわけりしにほけり  
つらん心とほけりなまこしりし物のも  
としし十帖乃小男女濃らるるき  
さゆひと云ふし三や代の間り君と信と  
るも事代のをさりおあよう管長乃道詩  
のありしや好小つりしりしものる  
まをくしりあといふた

桐皇の御門と尸柿小やうとよお月二日其

大上天皇

前坊

あふこのまゝ小は位をなづけておら孫ひ女柿  
のまゝ小かき行ひ也也此まろしやと八年  
ね云原女廿一と治世也

故院乃はさうかつと奏れせし小くこら

秋好中宮

再六條の御身也

あふひれせし小秋女小立孫ふことけく一小秋  
一ゆせ行ふ孫ふ小治女乃は此はあまの  
まら孫ひく梅をふとすし女小中女小立  
孫ふは法は皇后女小あうらせ孫ふ六條院  
乃は乃は小娘のやとこ小立女孫ひ  
うせ孫ひ一う一治世乃せし小くなら申坊女

桃園式部

槿御院

柿小娘のつらきに在孫ふ治世小父乃服  
うりてさうさせ孫ひて桃園式部小とこの女  
ま乃ま少しあひもせ孫ふわうか小はく一  
う一と治世小心つうてんて孫ひ一くこ  
はさうかつ君達あま物一孫ふ一槿小  
乃

三三

院乃を御川はさうなら原女治まきと夕方  
乃大臣の祖母孫政うせ孫ひてははら  
おら一うらなるは小これ孫ひ也

女

槿乃御院と相をにむてあひはも孫ひ  
一槿小くこら育乃原侍佐となふ  
いふ小くぶらひキ



春文

母明石仲文

六條院の女

式部卿宮

母春文小町

いみぎす乃と小はと給ひく月し下に坊小女  
白文乃幸く小夕方中君はえく六條院乃  
きんてんとんもと下小志給ふ二之を中  
けりうふ小式乃小女給ふ

白兵部卿宮

母同上

わがこれ下小はと給ひ白文幸く小之振  
きて兵部卿小任を繁れとありうひ給ひ  
三まくと方乃それお月く人ふるもたひ  
なくいみまう物志給ひしに心乃多う  
かこり給ひし流かこり梅乃給ひ  
とまお給ひま三給ひまけりうたふ  
院おかりしすうあけり給ふ

若君

母字信仲君 八まの女

右

母更元外本 永香及女御

白文乃幸く小夕方大おのりこれかちあり  
ま給ひし月をア文小白いとこれし人  
巴まおとつ也

中務卿宮

母文文日

おのり 晴まこれ日夕方大おおせり車に  
のせ給ひし又まあるやに太まのはなも  
れ時しお給ふ又冠あり小と燈のみと  
及と小まお給ひし人

一正文

母月ま文

もし掌のあやしな給ひて六條院乃  
のり小はと給ふおのり大お心給ひし人

女三子 母 美色女侍 丸丸大長女

かきり4に口の尻うさぎを煮る大おと年  
小丸孫子お吉会的美喜れ目はうさぎ  
て小丸はうさぎをこけ大おれいとやむし  
なぐおれひやうけらと一匹のまらうな  
てーはけ母れかきひたぶるくしと  
まら

母 美色女侍 梅察大御女

六条院

相色乃きふりとは孫小三子母としては孫  
月心の母母御上皇よとを孫ふてを  
はやそとくしめその年孫の世と孫り上  
て元根 法隆寺の泉の伝 うのあり入のそ孫り  
小丸 相色乃きふりとは孫 ち はやくに中ね 紅茶  
孫小三子 はやくに中ね 位 はやくに中ね 日ぞ小宰相 はやくに中ね

お少小大ね 柿小門侍のかんの君れとわ  
てて頃磨乃き小似備小下とての年乃三  
月小橋度出の石を海志う川ら孫小又の年  
れ相色乃きふりとは孫 はやくに中ね 小丸 はやくに中ね  
て叔のわ乃枝大御女 はやくに中ね とつら はやくに中ね 小内大臣  
孫 はやくに中ね 小内大臣 はやくに中ね 孫 はやくに中ね 小内大臣  
し女小大政大臣 孫 はやくに中ね 小内大臣 はやくに中ね  
れとる号は始ふ六条院と はやくに中ね 歳九 はやくに中ね 走かふ  
孫 はやくに中ね 小内大臣 はやくに中ね 孫 はやくに中ね 小内大臣  
四十御領先君 はやくに中ね 孫 はやくに中ね 小内大臣 はやくに中ね

夕暮の太大臣

母 美色女侍 波仕前大政大臣女

夕暮の暮に八月孫小月月母君小とく  
孫 はやくに中ね 小内大臣 はやくに中ね 孫 はやくに中ね 小内大臣 はやくに中ね



小元振きてあき紀よき御と登るる大守子の乃  
小入て寮試をうくその年れ冬を不節小入  
控らてゆれ此の冬二月小入帝也小補そ  
月秋除目小加うら子小朱雀院初幸れ  
内侍候女と高小中初小蝶小苑人以後  
を多小宰女中おと後乃うくくしに控中  
初云歳十九 づらふのよ小右大初成六 月下も大初  
えまてた大初小初を自云まき小右大長初  
め之何小初大長 辞大初

薰大将

母朱雀院女三女 実、相は初大初の子  
づらふの下小生る六條院のゆら也控ひし  
冷泉院ゆらうしてまひしてさ行 白文  
乃専小入服きて補四位初候とやりわりの  
初、石と中初曰まきし三位まきく宰相ふ初

中初 何小中初云なよりまき二月は成し  
物小初大初云そ本大初は多るありあひの  
川しきこの世乃初初ひるまきうらま初ひ  
行つる成い色百歩のゆら初初りあし

明名

み成川うら三月は明名の浦まきせと控ひ初  
風小京女の初りて大井小初控初実小六條  
院むく控初とまき初の立控初後乃うくく小  
まきまてより多微宗舎とやりわりのつと  
中ま 白ま小初大初ま

右侍

母三条上

づらふれ下小朱雀院御初の試樂の時  
らかまてとまらう女樂の長笛吹とらん白ま  
乃専小のづらうれ目む初せし人又白ま初

治まじ知系り見強ひし目申まは御使とて御  
てたらししちけま紀おりくたか

中納言 母後門侍

六条院其乃おかしむておみひ立終ふ二  
郎の君来雀院の侍候の試果なる  
き尚目お小君とて小ち終ふししり乃  
下ま久白白まものりこれ目右場のお  
日しくお仕しし

右大辨 母三条上

白まの巻し終るれ目お仕しし人志おと  
おまお治し終るし居しし久もあき乃  
下ま三郎の君少いし

侍従宰相 母不審

折しお小白ま初候ましての御定はる

たてし

源宰相中將 母三条上

とせしお人かお竹河は三位中納言  
巻し宰相中納言おはし中納言とて又終  
角小白ま乃お候を治ししち終ふし  
ろし乃終しおはししち終ふし殿上  
志終ふししし人しち冷泉院乃女侍小  
心おしし

頭中納言 母後門侍

竹河おおとておをちしお白まお表に  
おらひしししし父大長のお使を御りよひを  
てししししし人志おが小歌のおおとい  
ししし人なるし

四位少納言 母三条上

一品のまはるやこの時横川の信朝のち中  
まの法使せし人作は兵部佐志弁のむに  
為く兵部佐志弁

童 母

なまのふ小ふとろ女二三ふらのえん志孫の  
し何事く吹たりしと帝一君とあり

春宮女侍 母三条上

にやふふ小ふとろ女二三ふらのえん志孫の

申ふ 母日一 二二ふのふ乃方

三ふ 母右門侍

四ふ 母三条上

五君 母日一

六君 母右門侍 母乃乃方

此乃乃方

養兵部

とてい師ふふ女小兼雀院のゆ幸れ時兵  
部とりふを孫しし紅梅ふりくたて  
侍従 母ふふのふ 梅う夜小六条院よと父乃  
は儀ふしはふふふ

童 宮

同 二三人りふれ下小兼雀院は候の武

柴ふ兼成樂兼孫ふ

宮侍方 母ふ日位上紅梅のふ方

父れふふを孫ひて右母君ふくしてあせち乃  
大初ふ乃ふふと小位孫ふふふのふたふ  
あふふふ孫ひし

母承香殿女侍

あふふふ小六条院の馬場けあふふふ

師 父

八宮

馬のこゝろ目久乃兵衛でまふおちひたし  
つてりえ行ひし

母大長女 ときりき推成のほ母后の子  
小長孫ひしは源氏せとあつてまふ  
のほるうひ心よかおららあつてかき  
くそおろしは源氏小京乃は家まは統て  
宮治小ろり孫あつて楊娘れ巻まふ  
たてうむそくれまふとつて推成のこせ  
たまふ

総角大君 母大長女 父まふせ行ひくたか  
あつて大お急よかひ給ひし孫あけま  
のまふせ孫あ

申文 母おね  
総角に白を初まふまふまふまふまふ二条

三君

後ひしきこ孫あ古里とらふし申文九  
母ひしきこ孫あ古里とらふし申文九

母隆貞國大守小具まふとつて君哉とお  
具まふとつて位まふとつて又  
右左小なちてしとつては孫あは  
つしとつては孫あは孫あは  
のちつて申文九とつて申文九  
あつて大おあつては孫あは  
乃ならしとつては孫あは  
宮治小は孫あは孫あは  
白長孫のまふは孫あは  
成事又物あつては孫あは  
のいとつては孫あは  
右小あつては孫あは

式部卿家

東宮乃孝小むしとあつたかゝる大おふけし  
あこれ一人かけらふふくせ孫さうしりり  
かゝる大おふけらちしりり

侍従

母とせ乃水乃方

女君

母たがし 父まうせ孫ひてなまき母れ

せと右馬頭けさうし孫との石中ま  
とちしつらあしりしじふさう孫ふ一品  
れま一ゆつり孫ふかゝる大おふけり  
給ひし人ま乃君とせり也

冷東院

母は雲乃女院 父まき女にま  
まはしし孫院の孫子

御家御舅の孝二月に孫ふあま小まきま  
まみ代川くし流昂位りかの下まあり  
孫ふ 立位十八年十乃清子とまき

一品

母舞忌大臣女

母と孫ふしり竹川うらま

女一

母波仕大臣女 弘徽殿女清

一まうらりあ

女二

母一うらりあ 竹河小まき孫ふは

一まのあ

一品宮

母朱雀院小同 女一のまき一品

のまきしりり乃とふらる

女二

前の母院

あまひ小媛茂乃つらまにぬ孫ふ棟

右院乃流脈光なりも孫ふは乃ちり

れ女二にまきとあり

先帝

式部卿家

まきまきまのまきとすのし女小式部卿家

高雲女院

桐子の更衣うせ給ひてなほ二とあり  
孫ひて友をとりていし一の事さしては  
あゝ孫にさなくとも是孫ひさり六條院  
中おとすくし時より思ひくよまら孫  
ひて冷泉院成し孫ひ紅紫候ふ未  
雀院は母女沖成あえく后小三孫か  
くまこせ行ひくは林乃老十三日に  
からし候しるし孫ふまひくしは太正  
天皇にあらさるまみぶ孫くせ行ひるし  
そ高雲に三月之れ孫ひはくし二十九  
のやう日れまゝとす

源氏文

母文云

是雀院まゝまのし時よりまら孫ひて女  
三三文成し孫ふ友をとりてさくせ孫ふせ

若芽乃とふくも

源中約云

蘭にた徳経 梅うえに六條院双紙  
かせ給ひし人口ふの下の中約云とえ

若君

是雀院を頼れ試楽の月星を

寐ひし人

中約

信俊

氏敏を輔

ま三二人いしとの君大おのあつ

兵衛佐

かまし時父乃とをくむふ小はつし人  
梅多んはさ小の石乃中まままま一とあり  
孫ひしとて六條院を板くおその人へせ  
孫ひし時双紙くせ行ひ人

辨思大おを

母

榮上 ハナサキ

年比大おれ小乃方まで君達何れも生れん  
ア一程小大おまわらるる君小通ひうめて  
た世中冷し〜是(わ)のけとら生れ  
小おれ〜三三何れか〜か〜老家もや大お小  
大さち乃一便わけ〜人

母按察大御云々

母よけと〜とれ生れ小けとら祖母よ〜  
お花て十斗と小おこせ〜院係  
代中おまわ〜し〜付〜ハヤ〜生れ  
ひ〜た〜つ〜乃山ア〜て〜生れ小〜生れ小  
乃格おに〜乃家も乃むつ〜に〜生れ小乃  
生れ〜く〜むの屋上〜せてたニ榮院〜生れ  
れて十〜あ〜た〜生れア〜り〜家〜に〜病に  
〜り〜み〜我〜を〜く〜み〜の〜り〜を〜生れ小〜生れ

冷泉院女御

雲がれ生れよも〜し〜は〜思ひ小〜りて〜あま〜  
の〜中〜小〜色〜生れ〜る〜い〜と〜ま〜那〜え〜乃〜榮〜ア〜こ  
ま〜の〜や〜と〜え〜あ〜生れよ  
し〜女〜小〜入〜門〜ニ〜代〜つ〜ら〜に〜中〜え〜と〜え〜り〜生れ  
と〜い〜系〜乃〜と〜り〜い〜と〜〜と〜こ〜也

常陸宮

阿闍梨

源氏ハハ海小〜らて〜ゆ〜こ〜に〜い〜と〜  
よの本よ〜て〜あ〜根〜か〜ら〜し〜〜人〜と〜い〜と〜鼻赤  
き〜く〜か〜ら〜う〜如〜成〜か〜の〜〜ろ〜免〜も〜生れ〜は〜  
う〜い〜と〜生れよ

遠江君

東院 二条小〜川〜ひ〜た〜ま〜〜鼻〜之〜さ〜し〜く  
〜人〜に〜し〜巻〜卷〜小〜源氏君に〜あ〜ひ〜遠江に





に以中わつうらう上ノ宰おをを巻曰下持物云  
物に教乃かの大納言の如くう七孫よ君  
とら平わたり

紅梅衣衣

母日上 柳に日くふそ款ううこのまけ  
つこの目さおうひし人をとけうしに之  
服物者よあおわつうかの上に頭弁目下  
にた大弁柳目に入初云かうらなうら  
河一糸のまの半半位ととらし人すく  
虫に冷泉踏へとらしし紅梅に按察大  
納言と見る竹川に有大納言を大おけり  
たる右大おいらうゆと云たり又推をた  
白云のもらせはうそのれい久いま  
有大納言とひ人をうしんもら日東念に  
もらてあせらの大納言しえらるる書

大文

紅梅乃をいひしうまを相とを拾った兵  
アそれまのいしうまの君の事うらひ孫く

繁景殿女御

母故乃乃方

紅梅にまゐるうらひ孫く

中君

母お形

左衛門

藤宰相

まがりに有乃依候といえさきけ人うや  
うら乃ト小候茂みうれうらこし人  
い三人が方れれくの六君にまらまのま道  
うら孫ひし中三長うらひ人く又ま  
ひに六条院にまらうらひ冷泉踏へま  
アしし人う

頭中お

藤人うお

い人ゆららの巻ふタをけらみ建章  
殿とまらうらうらおうらうらうら

八郎君

とら乃ののちとら乃又夕暮れ大お一系乃  
またおひたはふとすてはがねと便せ又  
おくあしきし思ひうら出しとすとの後  
ふふし女小が初云々未作の信大又と作し  
しつら乃の上は約の時大又といえるしけか  
ならや

赤小柱に踏弄れ時とらハあしあし  
人ののうらみのゆをよ小娘王鬼年一  
ひ人なまや

玉姫号

母夕敷上 七川の〜夕敷のこの女  
が〜ては〜一より年をて玉姫号のまに  
大蔵(と家原氏)見れて六系流にいじられ  
うちとら乃より侍ま小柱に舞思れわ乃  
方とあはれし服は出大又の監う〜このこ

夕敷ののり侍のゆとた

弘徽皇女

母相日一門一

三とは〜に十二をり一とら乃冷泉院  
乃女一とら乃は母く鎌倉一終ひ一をく

夕暮大屋室

母梅察大船云小方

おつら〜てら〜の三系のみま小  
ふもれ〜夕暮れ大屋室よおひ出終ひま  
もつは心はかりひ久保中や雲井れわら  
我〜と口も〜ひ終ひ〜人女のうら  
く小お〜宰相仲わとす〜時大屋室  
〜うあ〜終ひ

近江君

わふとそこちあそ名付

母旅たな〜名のり出〜一人大長近一は終  
ひく女御乃は〜こに〜を終ひした





藤原女御

今上春まの御時よりまづり給ひ  
し明石の中よりあきこと法皇女  
ニまをりしうごをりてを孫よ  
なとらりたりくたはる又梅之よ藤原景茂  
とすし三君よりひんや

大大臣

女

竹河ふたはるを号し  
た考れたるの法子宰相仲おきん  
おとすりゆの時あゆ孫のま

大大臣

藤原女御

今上乃法皇又明石に大入居せり之を  
りかのまにたはる時をりしきよ  
せ孫の女  
ことごとく大入居りつるのよにたふれ  
日下にたはる居せたる女と辞せり

御中

乃法皇よりつるをま孫よ大入居せり  
し竹河にたはるをりしきよ  
りからしり野らる大入居  
り法皇大入居りし時をりし  
りしきよすしは思ひてわめのはる  
ぬらりあしきさるまははけても  
あまをま孫よ曉たてりしきよ  
あてりしきよ

藤原女御

朱雀院の女御今このはる

を孫よりしりかの下ふも

御中

母式アマメ

其の柱に十をりしきよを  
竹河乃二月にま母のわめ

はるをたたりし人ぞちりまの春の  
日さぬひしころ

涼亭君

母おろし 美は柱小ハツキを母乃形之  
にうさつさき父のぬひしころころは  
遊むとくは

右兵衛権

母おろし かつかの下小女糸の時ゆきの  
を吹流し又鳥雀院の汰候の目まじり  
舞し人竹川にちと中ねとりこも  
きいたまははきまて世を強なりとえら  
なからまのきにいぬのえんの日はまらふ  
るしきしひくならし

た大弁

母おろし ひくとおきおれ君六条院まて  
わらふそまらし時うてころち  
又鳥雀院の汰候試示の日おろしうき

頭中ね

母おろし ころちをまらし竹川小大弁年日は小  
大弁

美は柱上

母おろし 竹川に伝はれしきよ双中ね  
わらふのト小宮兵衛のふちりぬまら  
せ給ひまは紅梅大長梅察大和をとま  
しけし方よぬ給ふ又大長とあつこの口は  
にかんりうぬ給ひし母おろしてあは  
ちのまに伝はれ給ひし時まよのねは  
そんれかしころころ

冷泉院女侍

母おろし 竹川の四月小冷泉院女侍ころぬひ  
三まのは母おろし大長のは子守ねぬんが



入道播磨守

と侍申ねなすうふつ辞して  
播磨守にならばはまうてのり死からし  
さしつらむ明石のまきい辛比まきあれ  
に若うは氏大お須磨の浦にまじり  
舞ひしは言の音いひきてむくをり  
しいはひらうむいもあれういぞ井おきこく  
まきまきと舞ひしとすてまにあられ  
ひいたうしてりうのこははのうくと云  
てまねらふのみ

明石上

母中務の女この世まねね小枝浦  
とまねられて井に位し女小枝浦  
小流りてまねかかると中務

梅家大納言

母氏の母方れ祖父大氏の才  
明石入道ととづといふなり

雲林院律師

母氏君死後とらは文なと  
よもせひしくは小りなり

相倉文政

右後乃沖信の時まきい  
まきいそとまきいそ秋とせ  
まきいそとまきいそ秋とせ  
まきいそとまきいそ秋とせ  
乃出中に時めれ舞ひし幸康れや  
ういれたしとむきなり

梅家大納言

紫上

母小山僧如妹く

父れ大納言のまきいそ秋とせ  
まきいそとまきいそ秋とせ  
かだつとまねたむきなりあつうい



能にきりてまきひくくひひひひ  
皮之をの山方やまうくも思われける  
手なくたまる

梅察大納言

ふその君

し女小糸娘にまかりてや歌してさる  
スちりもくは娘とらり

大將

ね大おをいさり 東にいさる

左近お

右近今むい

松中納言たる者

左近お

松中川の流がたたるの所とふまを

小君なりし源氏流に沈してちりくし流に  
いかば娘りるし娘もやたらしうかばえ  
思者のうら死にせのやうとをまかりて  
とくすへは流もり時め男にいくして左近  
つとを関やにかさるを時のまのわし

空蝉君

父乃中納言とせよとね伊与分うまに  
なるえ名陰よめくしりく小糸と名ひ  
関やにまを登りて日暮に今にとり  
のちら継子乃し門守 高に侍 ちら  
かふといひてたふねしちらうくしね  
小入て二糸院乃東院小糸とまじり  
不のうなりしもの心やまをてあふ  
とにいおあまきしふらばありやたに  
ましといはは左をいといおし

空蝉君

女

母小中乃白 中ねなる人乃小方  
とせうしーる智ひいりて

参議之内卿

明石乳母

母院言と 父乃宰相いまでなれば  
人ならちるそとせしてな盡にせいあち  
経る心もちるまきまき人れりそ  
ちち心とほ成りしもいれく心  
下し終るし一成りしいりて  
に婚ういりて教れあち

三位中ね

夕顔と

波佐のあち終人おとすし一は  
て玉髪方とちりてな夕顔の宿と

宰相

源氏小あひるにの 院とやそおに  
そとてうせぬ時

宰相君

玉髪方れ君の女房と糸院あち  
しはくくのぬるち一人何のあ  
よお淡かけしとけいん

大儀有系惟光

母大式乳母

初め民アが補とらん女に格付守  
母とたまをまかけらり梅之に宰相  
なる源氏れは方ぬるあさこもし

山阿智梨

夕の月ふ照光とてそなはは  
法苑堂まで夕や乃一の田十九れ  
経るしーる

かお今婦 母日惟光

夕色乃暮をうたぐりてりそらつひに  
いしは大武にまこましてるのま  
こころはとがね今婦まくらあらし  
くすなまのほひし

三河守妻 母日一 夕色乃大武乃居たな

こし時あらし

兵衛尉

し女にまらぬあて及ととゆふこれ  
いそよの又さふも夕色乃あつりし  
いやく梅之にま来むけようけさ  
業あつてまあし

藤門侍

夕色乃あつて又さふをぬりし  
娘夕色乃あつて夕色乃あつて  
ゆふとくも

市橋磨

けししつうにそらまの  
かこころも

源義経

あ紫よそ花人をあつらひぬ右に  
細まはるもいとけしにゆけい  
け 往三河守しての  
たれとてい し女に大甲兵を  
あつて むす 夕色乃あつて  
は惟光とそいふれし父の  
て上りまらぬあつてけし  
人し夕色乃あつてかや  
道の女乃事あつて  
し女のをこよとらま  
さぬ

入部

さぬ

大甲兵

夕色乃あつての女乃事あつて

舟后

女三つを乳母の女に習わす大おにむし  
の事トすそし人さむりくさうし一蔵  
よりん

信濃介

始に信濃に下りたはる後よめく冥  
やのち信にまらうとせぬ

信守

信守大おはるたの牛川の女乃  
あつし関をに河にさふある子れを  
さそく見よる

お人をお守

信守大おをそ新院の山禰に  
信守一時一負たてし人く大おはす  
乃浦にたりむし強りしお殿ころはれ  
お守さかえりお守りて朝負付に松丸  
お守りし

お人をお守

お守のるれまむしおに信守

常陸介

こつ腹のいとと信守を信守のとかけ  
乃お守を信守の森とむし信守  
お守の女お守のあ方とつ信守にり  
お守の信守の守にむし信守  
お守の信守のまて父中お守とつ信守  
男

お人をお守

お守のるれまむしおに信守

蔵人右近將監

お守のるれまむしおに信守

童

お守のるれまむしおに信守



三郎

いさゝはくしに女まうけてまゝとのち  
しむいゝ玉大又置ふとられて作見え  
幸たちかんとあましく

楊名今事

夕色乃をいりる

婦なと

是くけりしまきつきてのちい

名歌君

とやいあてまといひうむめ君よう

てのちわん

兵部浦

ころんまふとこつこ

大浦今婦

女なつめの

口の女房うききめしわらんたるち居  
成のほきららうのちるどけき  
たけをらうい心やをたおわうま

不長

かいたくあつげのあひたよとるは  
ほみあつげあまきまのちる  
はうくてちのちのまふしけく  
まけいし君のち居成ふうま

藤原景殿女侍

右院乃女侍

花女里上

右院乃侍女侍のちうこま  
乙物居てまたなふ藤原の友のち  
すひ夕言れおのちのちいぬ



